

氏名（本籍）	荒井和子	（東京都）
学位の種類	博士（医学）	
学位授与番号	甲第1056号	
学位授与日付	平成30年1月17日	
学位授与要件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	What do Japanese residents learn from treating dying patients? The implications for training in end-of-life care	
審査委員	（主査）教授	塚田 敬義
	（副査）教授	塩入 俊樹                      教授 武内 康雄

## 論文内容の要旨

世界的に高齢社会が進行する中で、医師が適切なエンド・オブ・ライフケアを提供すること、そのために研修医・医学生に対して適切な教育指導を行うことは極めて重要であるが、研修医が、死にゆく患者の診療を通じて、どのような学習体験・感情体験をしているのか、またそれらが医師としてのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしているのかについては十分に解明されていない。本研究では、質的研究の手法を用い、我が国の研修医が、終末期患者の診療に際して、どのような感情で向き合い、何をどのように学び、その経験を通して医師としてのアイデンティティをどう形成し涵養させているのかについて分析した。

### 【対象と方法】

研修医の経験、省察、概念化、計画のプロセスを質的に明らかにするため、Kolbの経験学習理論 Experiential Learning Theory (ELT) を分析の理論的枠組みとして研究計画を立案した。便宜的サンプリング法を用いて卒業後3～5年目の後期研修医13名（男性8名、女性5名）を募り、研究参加の同意を得た後、半構造化インタビューを用いて質的データを収集した。インタビューに先立ち、参加者の背景情報をフェースシートで収集した。インタビューでは、亡くなった受け持ち患者のうち印象深かった症例（1例）を参加者に選んでもらい、その経験をインタビューガイドに沿って質問し、振り返った。インタビューガイドはELTのサイクル（具体的経験→省察的観察→抽象的概念化→計画・実践）に基づいて作成し、終末期患者の診療にあたって抱いた感情・思考の変化、指導医・コメディカルとの関わり、症例から得た学び、将来、指導的立場となった際の終末期患者診療に対する考え方などの認識を探索した。インタビューは申請者(KA)が単独で行い、研究参加者が話しやすいように環境に配慮し、個室で1名ずつ40～60分かけて実施した。インタビューはICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。データの分析は主題分析法を用い、逐語録を3名の研究者(KA, TS, YS)が独立して分析し、その結果を集約したのち、他の研究者3名(RI, CK, KF)とともに結果の妥当性・信憑性、およびデータ飽和を検証した。

### 【結果】

ELTを理論的枠組みとして、主題分析法を用いて分析した結果、3種類の観点から、8項目にわたる研修医の経験・省察・概念化が明らかとなった。

観点Ⅰ．終末期患者のケアを通しての感情的困惑（ELT 具体的経験）：(1)終末期医療現場における不確実性や疾患治療主義に対する困惑，(2)ストレスフルな状況下で患者や医療チームとのミスコミュニケーションが生じ自己効力感がゆらぐこと，(3)人として医師としての罪悪感と無力感，などの感情と経験が明らかとなった。

観点Ⅱ．終末期患者のケアに対する振り返り（ELT 省察的観察）：(1)患者や家族，そして自分自身の感情に向き合うことの意義，(2)個から多職種チームによるコミュニケーションという視野の広がり，(3)終末期患者に対する苦痛緩和の重要性の意義，を省察して学んでいた。

観点Ⅲ．エンド・オブ・ライフケアに対する認識の再構築（ELT 抽象的概念化・計画）：(1)先を読みながら患者・家族とコミュニケーションすることの重要性と患者中心医療への志向，(2)職業アイデンティティの深化と継続的能力開発への内発的動機づけが促進されていた。

### 【考察】

本研究は Kolb の ELT を理論的枠組みとして，終末期患者の診療経験から，研修医の感情変化，医療チームや患者・家族とのコミュニケーション，今後の理想とする臨床医像やエンド・オブ・ライフケアのあり方に焦点を当て，研修医の認識について分析した。ELT では，経験とは学びの第一歩であり，現状の知識・情報・スキル・考え方から進んで新たな行動を生み出すための出発点と位置付けられているが，本研究では，研修医は様々な陰性感情や自己効力感のゆらぎなどを経験しつつも，省察を経てエンド・オブ・ライフケアに対する認識の再構築を行うと同時に，医師としてのアイデンティティの深化にもつながっていった。これらの結果はエンド・オブ・ライフケア教育を考える上で重要な知見であり，医療の不確実性と限界の教育，多職種チームへの更なる参画，ロールモデルとなる指導医の存在，研修医の感情面への配慮と省察の促進，アイデンティティを涵養するための取組などが必要と考えられた。

### 【結論】

Kolb の ELT を理論的枠組みとした質的分析によって，研修医は終末期患者の診療を通じて，様々な陰性感情や自己効力感のゆらぎを経験しつつも，省察を経てエンド・オブ・ライフケアに対する認識の再構築を行うと同時に，医師としてのアイデンティティの形成や涵養にもつながっていることを明らかにした。

## 論文審査の結果の要旨

申請者 荒井和子は，終末期患者の診療において，研修医が様々な陰性感情や自己効力感のゆらぎを経験し，省察を経てエンド・オブ・ライフケアに対する認識の再構築を行い，医師としてのアイデンティティを涵養させていることを明らかにした。本研究の成果は，医学教育とエンド・オブ・ライフケア教育の発展に少なからず寄与するものと認める。

---

### [主論文公表誌]

Kazuko Arai, Takuya Saiki, Rintaro Imafuku, Chihiro Kawakami, Kazuhiko Fujisaki, Yasuyuki Suzuki: What do Japanese residents learn from treating dying patients? The implications for training in end-of-life care.

BMC Medical Education 17, 205 (2017). DOI 10.1186/s12909-017-1029-6